



公益財団法人 日本対がん協会 「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です

〒104-0045 東京都中央区築地5-3-3 築地浜離宮ビル7階
☎ 03-3541-4771 FAX 03-3541-4783 <https://www.jcancer.jp/>主な
内容

- 2~4面 朝日がん大賞・日本対がん協会賞 受賞者紹介
- 5面 2023年度HPVワクチン接種状況
- 6~7面 2020年全国がん登録年齢階級別罹患数

2024年度朝日がん大賞に中釜齊氏 国立がん研究センター理事長

「全ゲノム情報に基づく新たな治療薬の開発やがん予防への貢献」

日本対がん協会賞は4個人と1団体

日本対がん協会は、9月のがん征圧月間に合わせ、2024年度の日本対がん協会賞と、その特別賞である朝日がん大賞の受賞者を決定した。朝日がん大賞は、国立がん研究センター理事長の中釜齊氏(68)に贈られる。がん細胞の全ゲノム情報に基づく新たな治療薬の開発やがん予防への貢献が評価された。日本対がん協会賞は4個人と1団体に贈られる。受賞者の表彰式は9月13日、さいたま市大宮区で開かれる2024年度がん征圧全国大会埼玉大会で行われる。=2~4面に関連記事

中釜氏は1995年に国立がんセンター(現国立がん研究センター)研究所の発がん研究部室長に着任以来、環境中の発がん要因や遺伝子レベルでの要因を解明する研究に従事し、2016年から同センター理事長を務めている。日本でも遺伝情報をもとに個人に適した医療を提供する「がんゲノム医療」が進む中、がんや難病の全ゲノム解析(DNAが持つすべての遺伝情報の解析)に関する厚生科学審議会の専門委員会委員長や、ゲノム解析等の事業実施組織設立へ向けた準備室長としても活躍しており、全ゲノム情報に基づく新たな治療薬の開発や疾病予防への展開など、日本のがん対策に貢献してきた。今後、ゲノムデータ基盤によるがん予防への展開が期待される。

日本対がん協会賞の個人の部は、雨宮クリニック院長の雨宮清氏(79)▽鹿児島県民総合保健センター前理事長の池田琢哉氏(77)▽山梨県健康管理事業団理事の長田忠孝氏(79)▽香

川県総合健診協会会長の久米川啓氏(70)が選ばれた。いずれも地域でのがん予防やがん検診の推進、がん治療、患者支援などの業績が評価された。

団体の部は、滋賀県がん患者団体連絡協議会(菊井津多子会長)が選ばれた。滋賀県内の五つの患者団体で構成し、医療機関や職能団体、行政と連携してがん対策推進の原動力となっていることなどが評価された。

日本対がん協会賞は、協会設立10周年の1968年、がん征圧運動の一層の高揚を図る目的で創設された。対がん活動に顕著な功績のあった個人と団体、長年にわたり地道な努力を重ねてきた個人と団体などに贈られる。また、朝日がん大賞は、日本対がん協会賞の特別賞として2001年に朝日新聞

社の協力で創設。がん予防を対象に、将来性のある研究も発掘、医療機器類の研究・開発、患者支援などで優れた実績をあげて社会に貢献し、かつ、第一線で活躍する個人・団体などに贈られる。



2024年度の選考委員会は次の通り。

委員長 垣添忠生・日本対がん協会会長▽**副委員長** 大内憲明・東北大学大学院医学系研究科特任教授・東北大学名誉教授▽**委員**(五十音順) 梅田正行・日本対がん協会理事長、佐野武・がん研究会有明病院院長、津金昌一郎・国際医療福祉大学大学院医学研究科公衆衛生学専攻教授、松本吉郎・日本医師会会長、矢部丈彦・朝日新聞東京本社くらし報道部長

2024
年度

日本対がん協会賞・朝日がん大賞受賞者の皆さん

朝日がん大賞

中釜 齊 (なかがま・ひとし) 68歳 国立がん研究センター理事長

日本対がん協会賞

個人の部

雨宮 清 (あめみや・きよし) 79歳 雨宮クリニック 院長**池田 琢哉** (いけだ・たくや) 77歳 鹿児島県民総合保健センター前理事長**長田 忠孝** (おさだ・ただよし) 79歳 山梨県健康管理事業団 理事**久米川 啓** (くめがわ・はじめ) 70歳 香川県総合健診協会 会長

団体の部

滋賀県がん患者団体連絡協議会 (菊井津多子会長)

※敬称略、年齢は9月1日現在

出発点は環境発がん研究

ゲノム情報との統合で

世界をリードする成果に期待

国立がん研究センター 理事長 中釜 斉 氏



国立がん研究センター 理事長 中釜 斉 氏

がん細胞の遺伝子から患者一人一人の遺伝子の変化、生まれ持った遺伝子の違いを解析し、がんの性質や体質、病状に合わせた治療が始まっている。がんゲノム医療はこの20年ほどで飛躍的に進んだ。

がんゲノム情報に基づく診療や臨床研究・治験の実施、新薬等の研究開発、がんゲノム関連の人材育成などを行う「がんゲノム医療中核拠点病院」である国立がん研究センターの理事長、厚生科学審議会「全ゲノム解析等の推進に関する専門委員会」委員長なども務める。

米国マサチューセッツ工科大学がん研究センター研究員を経て、1995年から国立がんセンター(当時)研究所の発がん促進物質研究室長として、環境中の発がん要因や遺伝子レベルでの修飾要因の解明に取り組んだ。

当時、喫煙や飲酒、感染症が原因と考えられるがんはあったが、十分に解明されていなかった。そうした中、大腸がんの環境中の要因についてラットを使った研究を進め、がんの生物学的な特性の解明や新たな治療法の開発、

早期診断、発がんの高リスク群に対する個別予防のためのバイオマーカー開発などにつなげることをめざした。

研究では、加熱した肉食品に含まれるがん原性物質ヘテロサイクリックアミンと大腸がんの関連を調べ、ラットに投与すると、ヒトと同じようなプロセスで大腸がんを発症することが分かった。また、化学物質がDNAに付着し、それを修復する際にDNAに傷ができてがんになることから、どこに付着するのかについても調べた。

さらに、喫煙や食事などの条件が同じでも、がんになる人とならない人がいることから、環境要因と遺伝的要因が相互に作用して多くの疾患ができると考え、大腸がんのなりやすさを決める遺伝的な素因の研究も進めた。

当時、遺伝的背景の発がんへの影響を調べる方法は動物モデルだけ。同じ化学物質を投入して大腸がんになりやすいラットとなりにくいラットを掛け合わせ、数百匹のラットから原因遺伝子を探した。その結果、ある領域に発がんの関係性があることが分かった。

研究を進めるうちに2000年代に入り、ヒトのゲノム解析が比較的容易にできるようになると、動物モデルの結果をヒトに反映させるよりも、ヒトの結果を動物モデルで証明する方法が現実的となり、ゲノム解析の重要度が増してきた。

研究所副所長を務めていた2008年、国際的にがんの全ゲノム解析の機運が高まり、国際がんゲノムコンソーシアム(ICGC)が設立された。世界各国の研究機関や研究者が協力して78種類のがんのゲノムのデータベースを作り、新たな治療法の開発などをめざした。日本からは国立がんセンターも参

加し、日本人に多い肝臓がんの全ゲノム解析を進めたほか、胃がんや肝臓がんなど日本人やアジアに多いがんでも成果を上げた。

データの積み重ねから、日本人の肝臓がんや腎臓がんなどに特徴的な変異パターンがあることも分かってきた。日本人が日常触れる環境の中に特徴的な原因が見つかれば、それを回避することで予防につなげられる。今後データが蓄積されれば、研究はさらに加速する。また、血液がんや生活習慣病などの素地になるクローン性造血など、体内で起こる変異についてもゲノムに着目することで解明が期待できる。

ゲノムの解析で得られた成果は動物モデルで検証することが必要だといいい、「日本の伝統的な環境中の発がん研究や化学物質による発がん研究と、急速に進歩するゲノム解析技術、ゲノム・エピゲノム情報を統合して世界をリードするような成果につなげることを期待したい」と話している。

中釜 斉(なかがま・ひとし)氏

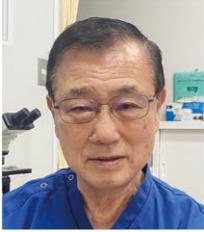
略歴

1956年、鹿児島県出身。1982年に東京大学医学部卒業、東大医学部附属病院助手を経て1991年、米国マサチューセッツ工科大学がん研究センター研究員に。1995年以降、国立がんセンター研究所の発がん促進物質研究室長、生化学部長、副所長、研究所長を歴任。2012年から国立がん研究センター理事、2016年から理事長。

「ヒト発がん要因の同定と多段階発がんの本態解明に関する研究」で、2021年の日本癌学会「長興又郎賞」を受賞している。

日本対がん協会 個人の部

長年にわたり婦人科がんの研究・治療に従事 がん検診・予防の啓発も



雨宮 清(あめみや・きよし)氏 79歳 雨宮クリニック院長

慶應義塾大学医学部で婦人科がん治療に取り組み、子宮内膜がん細胞株の培養技術を活用して発生抑制に至る薬剤、抗がん剤による影響などを研究。慶大病院産婦人科などを経て、1976年に横浜市の警友病院(現けいゆう病院)へ移った。

これまで対峙してきた患者の中には、ステージ3以上の患者も少なくなかったが、検査成績の検討を重ねて手術や抗がん剤治療、免疫療法などさま

ざまに手を尽くしてきた。その姿勢から多くの患者の信頼を得ている。また、神奈川県内の婦人科がんの統計調査にも積極的に取り組んできた。特に全国の先駆けとなった絨毛性疾患(妊娠時の胎盤をつくる絨毛細胞から発生する絨毛がんなどの病気)の登録事業では、21年間にわたる絨毛性疾患の発生状況をまとめ、新たな臨床分類を行い、関連学会へ提唱して採用されるなど、全国の医療機関での治療にも貢献した。

けいゆう病院を退職した2005年、

横浜市に雨宮クリニックを開業し、引き続き、がん患者の診察・治療に取り組む。経済的に困窮している住民や外国籍の住民も少なくない中、外国語も駆使して婦人科がんの検診、予防の啓発にも努めている。

日本対がん協会賞を受け、「これまでの長い道のりは患者の理解・信頼があってこそ成し得た共同作業であり、受賞は大変光栄なこと。医師は患者のためにあることを心の中で思い返しながらかんに立ち向かっていきたい」と話している。

行政との連携強化 がん検診の体制整備などで県民の健康維持に貢献



池田 琢哉(いけだ・たくや)氏 77歳 鹿児島県民総合保健センター 前理事長

2010年、鹿児島県医師会長への就任と同時に鹿児島県民総合保健センター理事長に就き、28の有人離島を含む南北600kmと広大な県域で、検診車による巡回健診を実施し、県内のがん検診、がん予防事業に尽力した。

2010~2022年度では延べ533万人が各種検診を受け、6757件のがんが発見され、早期の治療につながった。

同センターは2012年の公益財団法人移行を機に、より一層、県民の健康管理と保持増進を図るため、同センター主催で市町村がん対策主管課長及び担当者等会議を開催するなど、県や市町村との連携強化に取り組み、がん検診の受診率・精度管理の向上に努めた。また、2011年に乳房X線(マンモグラフィ)を2機搭載したデジタル検診車を全国に先駆けて導入し、2019年3月に検診車のデジタル化を完了させるなど、体制の強化を進めてきた。

コロナ禍では全国的にがん検診受診者数が減る中、感染症対策の徹底や受診環境の整備を図り、メディアを通じた広報の一環として地元テレビ局協賛のもと番組内にコーナーを設けるなど、がんに関する正しい知識の普及啓発ならびに受診勧奨に努めた。

日本対がん協会賞受賞に際し、「思いもよらず、非常に感謝しています。県民の命は平等という理念の下、全県下平等の検診体制づくりのため職員とともに頑張ってきました」と語った。

肺がん患者等の地域医療の推進に尽力



長田 忠孝(おさだ・ただよし)氏 79歳 山梨県健康管理事業団 理事

北海道大学医学部を卒業し、1975年から国立療養所道北病院(現国立病院機構旭川医療センター)で肺がん治療に努めたが、当時は予後が悪く、存命できる患者は少なかった。

肺がんの早期発見をめざした検診を行うため、1982年に山梨県へ戻り、組合立飯富病院(身延町)に勤務。県内で初めて市町村と連携した肺がん検診を実施し、5町と協働して峡南在宅医療支援センターを設けるなど、過疎地域

での肺がん患者等の医療に尽くした。過疎地域では必然的に在宅医療に移行し、最後は患者を自宅で看取ることになる。そうした患者が増えてくるうち、肺がんの検診や治療と同じ様に在宅医療や看取りもライフワークとなっていた。

また、山梨県健康管理事業団が実施する肺がん検診では、1982年から胸部画像の読影医を務め、同事業団の理事となった2013年以降は診察医も兼務し、がん検診に積極的に関わっている。2023年度は1万6000件超の肺がん検診を読影し、所見がある画像の比

較読影は4700件に上る。肺がん罹患患者数の減少をめざして予防啓発にも力を注いでいる。

飯富病院を退職後、2014年に甲府市で開業した「長田在宅クリニック」では、がん患者の看取りも行うなど、地域医療に貢献している。

日本対がん協会賞の受賞について「肺がんはタバコ対策をしっかりとやらないとだめだが、今回の受賞は一区切りになり、これからの励みになります」と話している。

消化器がんの外科治療に尽力 女性のがん検診受診率向上にも取り組む

久米川 啓(くめがわ・はじめ)氏 70歳 香川県総合健診協会 会長



1978年に東京医科大学を卒業後、東京女子医科大学消化器病センター消化器外科で医療練士、医学博士を授与された。社会保険山梨病院を経て、1987年に香川医大外科に勤務し、消化器がんの外科治療に携わってきた。

2014年に香川県医師会会長に就き、日本対がん協会香川県支部長、香川県総合健診協会会長として香川県のがん検診の受診率向上やがん予防の知識啓

発に尽力してきた。また、香川県がん対策推進協議会会長として第4次香川県がん対策推進計画を取りまとめた。

さらに、ピンクリボンかがわ県協議会代表として、乳がんの早期発見、早期治療の啓発を進めており、県内の乳がん検診実施医療機関によるピンクリボンかがわ県協議会メディカルネットワークを組織し、マンモグラフィ検診の実施状況調査や医療従事者向けの講習会を行うとともに、働く女性の受診率向上のため、休日に検診を行う「かがわマンモグラフィサンデー」や「乳がん・子

宮頸がん同時検診」事業を実施。子宮頸がん予防を呼びかけるイベントとして講習会やコンサートも開き、若い女性に対して子宮頸がんの知識普及に務めた。

この度、日本対がん協会賞を受賞し、「多くの方々と共に活動してきた事が評価され、大変光栄に思います。今後も行政の方々や病院関係者、そして組織の方々とも協力して県民のがん予防、治療に向け活動していこうと思います」と話している。

日本対がん協会 団体の部

患者・行政・医療の橋渡し役 地域のがん対策推進の原動力に

滋賀県がん患者大集会



滋賀県がん患者団体連絡協議会 (菊井津多子会長)

現在、乳がん患者団体のあけぼの滋賀(あけぼの会滋賀県支部)▽オストメイト(病気や事故などにより、お腹に排泄のためのストーマ〈人工肛門・人工膀胱〉を造設した人)の団体「日本オストミー協会滋賀県支部」▽C型・B型の肝炎患者とその家族でつくる「滋賀肝臓友の会」▽がん経験者と医師でつくる「よりよいがん医療をめざす近江の会」▽滋賀肺がん患者会「肺ゆう会しが」の5団体と個人会員で構成している。

主な活動は、がん患者や家族の声を集約し、行政や医療現場へ届けるほ

か、県内のがん医療を推進する協議会や委員会、部会に参画する。また、県内12カ所の病院内での「がん患者サロン」開催、「滋賀県がん教育スピーカーバンク」による小中高校生や医学生、看護学生へのがん教育、県や病院の協力による「滋賀県がん患者アンケート」も実施している。

あけぼの滋賀の代表者でもある菊井会長は「このたびは16年間一つ一つ積み上げてきた成果を評価していただき、大変光栄なことと思っています。亡くなった仲間にも受賞を報告したい」と話している。

2007年のがん対策基本法の施行を契機に、2008年に滋賀県のがん医療の向上、がんになっても安心して暮らせる社会づくりへの貢献を目的として設立された。医療機関、職能団体、行政と課題を明確化し、必要な方策を協力して実施し、県民主導によるがん対策推進の原動力となっている。

2024年度 グループ支部永年勤続表彰 28支部、72人(敬称略)

- | | | | | |
|--------------------------|----------------------------|------------------------------|----------------------------|--------------------------|
| ◇北海道対がん協会
佐藤和美 | ◇群馬県健康づくり財団
安部聡子、高山千代子 | 河島恵介 | ◇山口県予防保健協会
三宅亜矢子、藤屋純一 | ◇佐賀県健康づくり財団
中山加奈、中島美穂 |
| ◇岩手県対がん協会
菅原将人、石田由貴 | 関口利江 | ◇富山県健康増進センター
谷口直美、稲垣綾 | 吉松康行、山本有希 | 末次耕平、眞島三智子 |
| ◇宮城県対がん協会
山ノ内正美、内海誠 | ◇埼玉県健康づくり事業団
中村友理子、小林哲也 | ◇石川県成人病予防センター
金崎衣里 | 木村紀子、姫野道子 | ◇長崎県健康事業団
井崎真由美、濱崎成美 |
| 田名部朋子 | 渋谷俊一郎 | ◇京都予防医学センター
矢田忠資、村上晃司 | ◇とくしま未来健康づくり機構
下藤美千代 | 谷本早、馬場博登 |
| ◇やまがた健康推進機構
福田紋子 | ◇ちば県民保健予防財団
藤永寛章、大森満里絵 | ◇兵庫県健康財団
吉田和弘 | ◇香川県総合健診協会
大塚真由 | ◇熊本県総合保健センター
水野貴子 |
| ◇茨城県総合健診協会
軍司克弘 | 御簾納直紀、林寿恵 | ◇鳥取県保健事業団
森田理恵 | ◇高知県総合保健協会
杉本章二 | ◇宮崎県健康づくり協会
馬場美穂 |
| ◇栃木県保健衛生事業団
田邊大輔、星野洋一 | ◇山梨県健康管理事業団
藤本江津子、今村玲奈 | ◇鳥取県保健事業団
山下裕子 | ◇ふくおか公衆衛生推進機構
刀根祐子、長谷川淳 | ◇鹿児島県民総合保健センター
森美幸 |
| 豊田敬介、尾熊朋子 | ◇長野県健康づくり事業団
矢崎佳之 | ◇広島県地域保健医療推進機構
廣段達彦、石丸久美子 | 撫尾昭、河島加奈子 | ◇沖縄県健康づくり財団
島田奈巳恵、 |
| 渡邊律子 | 金澤美緒、高木美和 | | 山本麻衣子 | 小田部幸江、下地聡、
宮良京子、山城恵美 |

HPVワクチン
定期接種

2023年度の定期接種(1回目)は33万2902人

キャッチアップ接種(1回目)は33万5000人超

子宮頸がんの原因になるヒトパピローマウイルス(HPV)の感染を防ぐワクチンの定期接種とキャッチアップ接種について、厚生労働省は各都道府県を通じて全市町村に調査を行い、2023年度の実施状況(速報値)をまとめた。

定期接種は小学校6年生から高校1年生に相当する年代(12~16歳)の女性が対象。HPVワクチンには2価(サーバリックス)、4価(ガーダシル)、9価(シルガード9)の3種類があり、接種開始時の年齢やワクチンの種類によって接種回数は2~3回と異なるが、接種完了までの期間は最短でも約6か月かかる。

一方、キャッチアップ接種は、個別通知など積極的勧奨が休止していた期間に定期接種の対象年齢だった1997~2007年度生まれの女性が対象。

積極的勧奨が再開された2022年度から3年間実施するもので、2025年3月末で終了する。

2023年度の定期接種の接種者数は、1回目が33万2902人、2回目が21万

4832人、3回目が13万3203人だった。全国年間実施率は、2023年度が1回目62.1%▽2回目40.1%▽3回目24.9%だった。これに対し、2022年度はそれぞれ42.3%▽39.6%▽30.5%、2021年度はそれぞれ37.4%▽34.4%▽26.2%だった。

このうち2022、2023年度の数値は、接種者数を標準的な接種年齢(中学1年相当)の総人口で除して算出した。また、2021年度の数値は、地域保健・健康増進事業報告の「定期の予防接種被接種者数」から引用した。

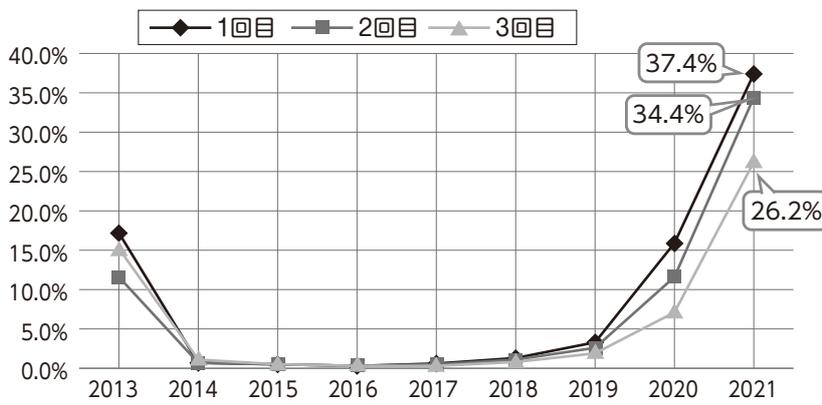
一方、2023年度のキャッチアップ接種の接種者数は1回目が33万5110人、2回目が29万8438人、3回目が30万1035人だった。いずれも2022年度の接種者数を上回った。

2023年度のHPVワクチンの定期接種の実施状況

		第1回	第2回	第3回
従来の定期接種	接種者数(人)	332,902	214,832	133,203
	全国年間実施率(%)	62.1	40.1	24.9
	参考)2022年度(%)	42.3	39.6	30.5
	参考)2021年度(%)	37.4	34.4	26.2
キャッチアップ接種	接種者数(人)	335,110	298,438	301,035
	参考)2022年度	305,381	250,389	159,009
	過去の接種歴が不明(人)	—	170	203

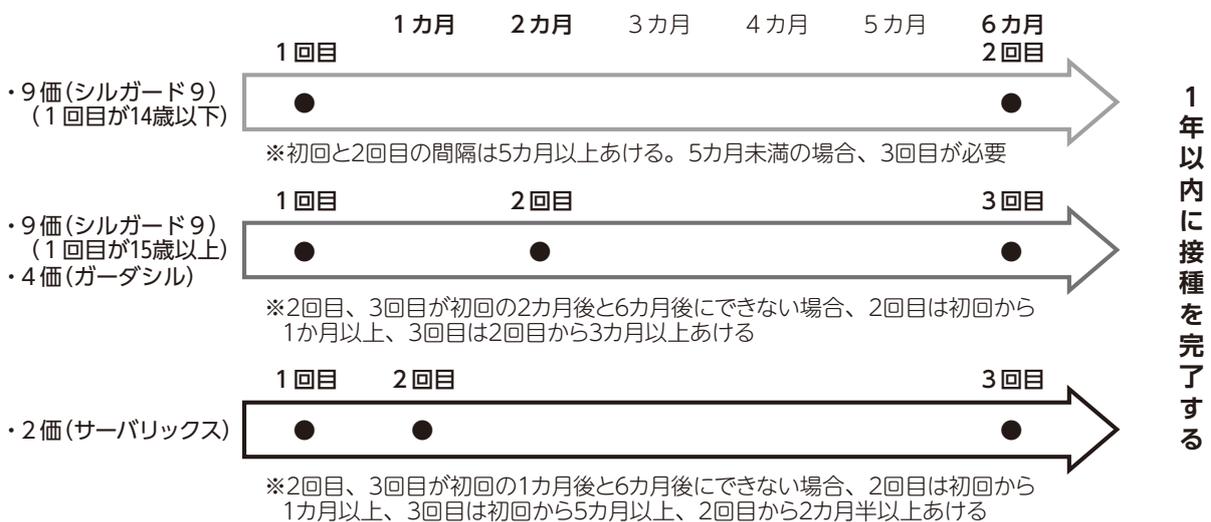
厚生労働省資料より

定期の予防接種実施率 (HPV感染症)



厚生労働省「定期の予防接種実施者数」より (https://www.mhlw.go.jp/topics/bcg/other/5.html)

標準的なHPVワクチン接種スケジュール



第4期がん対策推進基本計画、指針改正など盛り込む

厚生労働省

2024年版「がん検診事業のあり方について」公表

厚生労働省は7月、市町村や職場が行う対策型がん検診が適切に実施されることを目的とした報告書「がん検診事業のあり方について」を改定した。第4期がん対策推進基本計画に伴う受診率目標の引き上げ、子宮頸がん検診へのHPV検査単独法導入などを受けて2023年版の内容を更新した。

報告書は2008年に「今後の我が国におけるがん検診事業評価の在り方について報告書」(平成20年報告書)が公表された。その後、2020年度、2021年度に厚労科研「がん検診事業の評価に関する研究」で報告書の見直し事項や検討課題が整理されたことから、2023年6月に「がん検診事業のあり方について」(令和5年報告書)がまとめられた。

今回更新された主な内容は、「受診率の向上」で対策型検診の受診率目標

が第3期がん対策推進基本計画の50%から、第4期計画の60%に引き上げられた。がん検診の精度管理についても向上させるとともに、精密検査受診率90%をめざすとしている。

また、「対象年齢層を設定した重点受診勧奨の実施」では、対象者全員の受診機会が用意されたうえで受診を特に推奨する者として、これまでの69歳以下に加え、新たに「HPV検査単独法による子宮頸がん検診については、60歳以下の者」とすることが追記された。

「指針で定めるがん検診の内容」では、子宮頸がん検診の対象者が年代で分けられた。従来の「問診・視診・子宮頸部の細胞診及び内診」(2年に1回)は「20歳代」となり、「30歳以上」は実施体制が整った自治体では「問診、視診及びHPV検査単独法」(5年に1回)

も選択できる。ただし、HPVの罹患リスクが高い人は1年後に再び受診する。

また、肺がん検診は、従来の「質問(問診)・胸部エックス線検査及び喀痰細胞診」(年1回)だが、対象者に「喀痰細胞診については原則として50歳以上の重喫煙者(喫煙指数600以上の者)のみ」と追記された。

7月に開かれた厚生労働省の「がん検診のあり方に関する検討会」では、今後の報告書の改定頻度やタイミングについて議論があり、がん対策推進基本計画の期間に合わせて見直しを図るとの意見が出された。また、改定に際しては、胃がん検診への内視鏡検診導入後、実施できている自治体が6割にとどまっている事例を挙げ、地域間での医療格差に関する基礎的な考え方も盛り込む要望も出された。

50代まで女性が男性を上回る 男性は60代から急増 男女ともピークは70代

— 2020年全国がん登録罹患数・率報告 年齢階級別罹患数から —

厚生労働省が公表した2020年の全国がん登録罹患数・率報告によると、この年に新たにがん(上皮内がんを除く)と診断された人は、94万5055人。男性は前立腺、大腸、肺、胃、肝・胆管の順で罹患が多く、2019年と比べると、肺が胃を上回った。女性の罹患数は乳房、大腸、肺、胃、子宮の順で多かった。上位5部位が全部位に占める割合は男性65.5%、女性63.2%となっている。

5歳ごとの年齢階級別にみると、15歳未満の小児がんは2080人。男女ともに最も罹患数が多かったのは白血

病だった。次いで脳・中枢神経系、悪性リンパ腫などの順となっている。

全部位の罹患数の推移をみると、55~59歳までは女性の罹患数が男性を上回っている。女性の乳房、子宮(子宮頸部、子宮体部)などの罹患が多いことが影響しているとみられる。このうち、乳房は45~49歳で1万471人と最初のピークを迎えた後、8000~9000人で推移し、70~74歳で1万1773人と再びピークを迎えている。全部位でみて、女性の罹患数が最も多い年代は70~74歳で、5万7910人となっている。

男性も全部位で罹患数が最も多い年代は70~74歳で10万9295人となっている。部位別で最も罹患数が多い前立腺の推移をみると、55~59歳で2645人、60~64歳で5969人、65~69歳で1万2586人と急増し、70~74歳で2万905とピークを迎えている。他の部位でも同様の傾向がみられ、いずれも70~74歳がピークになっている。

女性の罹患数の推移を部位別でみても、70~74歳あるいは75~79歳でピークとなる部位が多くなっている。

古本で日本対がん協会に寄付ができます

読み終えた本やDVDなどを活用しませんか？

詳しくは「チャリボン」 <https://www.charibon.jp/partner/jcs/> (ISDNのバーコードがついた書籍類が対象です)

charibon by VALLE BOOKS

お問合せ(株式会社バリューブックス) : 0120-826-295
受付時間 : 10:00-21:00(月~土) 10:00-17:00(日)

年齢階級別罹患数 (上位10部位)

男性

	前立腺	大腸 (結腸— 直腸)	肺	胃	肝および 肝内胆管	すい臓	食道	腎・尿路 (膀胱除 く)	悪性 リンパ腫	膀胱	全部位
総数	87,756	82,809	81,080	75,128	23,707	22,557	20,128	19,660	19,246	17,424	534,814
0-4歳	3	1	1	3	20	0	0	27	42	1	488
5-9歳	1	0	0	1	5	2	0	3	49	0	286
10-14歳	0	4	0	2	2	3	0	0	76	1	347
15-19歳	1	7	4	3	1	2	1	4	72	0	423
20-24歳	1	36	7	9	5	3	1	10	106	0	653
25-29歳	4	82	20	38	9	11	2	22	117	4	1,029
30-34歳	1	215	57	77	13	29	7	53	143	10	1,599
35-39歳	4	488	146	209	51	69	21	156	182	17	2,621
40-44歳	22	1,051	329	426	124	145	86	341	334	47	4,879
45-49歳	164	2,105	853	806	280	380	286	673	556	167	9,263
50-54歳	843	3,385	1,582	1,355	537	735	563	971	710	293	14,477
55-59歳	2,645	5,171	2,873	2,706	1,032	1,167	1,193	1,298	1,083	554	24,415
60-64歳	5,969	7,335	5,575	5,344	1,817	1,737	2,063	1,776	1,570	1,112	40,785
65-69歳	12,586	12,040	10,787	9,972	3,021	2,863	3,162	2,718	2,345	2,041	71,452
70-74歳	20,905	16,704	17,827	15,841	4,647	4,446	4,497	3,736	3,385	3,364	109,295
75-79歳	19,930	14,211	16,987	15,428	4,499	4,365	4,032	3,244	3,129	3,344	102,637
80-84歳	13,735	10,743	12,204	12,308	3,871	3,375	2,552	2,483	2,836	2,867	78,455
85-89歳	7,727	6,364	7,976	7,580	2,639	2,154	1,230	1,482	1,791	2,270	49,194
90-94歳	2,680	2,351	3,223	2,583	980	906	375	550	624	1,066	18,768
95-99歳	494	471	588	411	143	156	53	107	88	244	3,471
100歳以上	41	45	41	26	11	9	4	6	8	22	277

女性

	乳房	大腸 (結腸— 直腸)	肺	胃	子宮	膵臓	悪性 リンパ腫	卵巣	甲状腺	皮膚	全部位
総数	91,531	64,915	39,679	34,551	28,492	21,891	16,751	12,738	11,918	11,427	410,238
0-4歳	0	1	0	2	0	2	27	3	0	3	398
5-9歳	0	0	0	1	0	2	31	5	5	1	263
10-14歳	3	6	0	2	1	12	27	34	18	4	298
15-19歳	5	5	5	5	2	16	52	97	63	4	441
20-24歳	44	37	13	13	40	19	80	172	201	20	888
25-29歳	252	71	25	41	222	24	115	201	332	35	1,608
30-34歳	918	192	53	102	718	35	128	304	515	63	3,512
35-39歳	2,451	482	127	207	1,330	68	208	450	680	72	6,780
40-44歳	6,057	911	260	327	1,972	124	293	809	873	165	12,981
45-49歳	10,471	1,717	605	567	3,090	272	437	1,363	1,078	234	21,779
50-54歳	9,132	2,404	989	756	3,799	441	602	1,524	1,139	283	23,609
55-59歳	8,478	3,205	1,495	1,096	3,591	738	909	1,363	988	388	25,550
60-64歳	8,805	4,289	2,387	1,812	2,801	1,132	1,246	1,248	1,023	464	29,585
65-69歳	10,424	6,697	4,482	3,303	2,846	2,007	1,896	1,267	1,087	792	41,814
70-74歳	11,773	9,892	7,320	5,432	2,849	3,347	2,645	1,344	1,476	1,234	57,910
75-79歳	9,105	10,166	7,405	6,043	2,092	3,817	2,610	954	1,024	1,497	56,146
80-84歳	6,576	9,602	6,074	5,883	1,466	3,750	2,329	699	652	1,737	50,303
85-89歳	4,227	8,511	4,693	5,187	1,050	3,326	1,953	539	471	2,015	42,637
90-94歳	2,116	4,935	2,657	2,796	463	2,044	904	277	226	1,497	24,515
95-99歳	612	1,582	956	873	149	624	231	80	60	785	8,134
100歳以上	82	210	133	103	11	91	28	5	7	134	1,087

厚生労働省『令和2年全国がん登録 罹患数・率 報告』より作成
*上皮内がんを除く／総数は男女および性別不詳の合計

子宮頸がんは男性には関係ない？

～がん相談ホットラインの現場から～

子宮頸がんは女性だけの問題だと思いますか？子宮頸がんは女性特有のがんですから、そう思う方が多いかもしれません。でも、男性も無関係ではありません。

● ● ●

「自分のせいでがんになったのでしょうか……。自分もがんになることがあるのでしょうか……」

恐々とした声でホットラインに電話をくださったのは、パートナーが子宮頸がんと診断された男性でした。

色々調べていくうちに、子宮頸がんはヒトパピローマウイルス(HPV)への感染が主な原因であることや、感染経路は主に性交渉だとわかり、自分が感染していてうつしてしまったのではないかと思ったそうです。

さらに、男性もHPVに感染することがあり、陰茎がんや肛門がん、中咽頭がんなどの原因の一つと考えられていることも知り、怖くなったということでした。

HPVは200種類以上の型があるごくありふれたウイルスで、誰でも感染する可能性があります。このうち、いくつかの型ががんに関係するということがわかっています。ただ、感染しても多くの場合は自然に排除されていくため、HPVに感染したからといって必ずがんになるわけではありません。排除されずに感染の期間が長く続いた場合に異常な細胞に変化し、やがてがんになることがあると考えられています。

● ● ●

前述した男性のほかにも男性からご

相談いただくことがあります。

「彼女ががんになったのは自分のせいですか」「自分がうつしたかもしれないと思うと彼女に申し訳ない」などと自分を責めて苦しんでいる方だけでなく、「色々考えていたら彼女との関係がギクシャクしてしまった……」と二人の関係にも影響が出て悩んでいるという相談や、「子供を持てますか」と妊娠や出産を心配する声も寄せられます。

こうしたことを考えていくと、子宮頸がんはやはり、女性だけの問題ではありません。男性にもぜひ、自分事として考えてほしいと思います。

子宮頸がんの主な原因となるHPVへの感染予防に有効なのがワクチン



接種です。日本では2013年4月から公費(無料)による定期接種を始めましたが、ワクチン接種後に多様な症状が報告されたため、厚生労働省が接種の勧奨を控えていました。しかし、安全性や効果などについて専門家の評価を得て2022年4月から積極的な勧奨が再開されました。

また、陰茎がんや肛門がん、中咽頭がんなどにおいても感染予防に有効だと考えられています。

大切なパートナーと自分の命や未来を守るために、感染の予防についても一緒に考えてほしいと思います。

● ● ●

HPVワクチンは2価(サーバリックス)、4価(ガーダシル)、9価(シルガード9)と3種類あります。すべてのHPV感染を防げるわけではありま

せんが、そのうち9価はHPV感染を8～9割を防げます。小学校6年生から高校1年生相当の女性は定期接種の対象となり、公費(無料)で接種できます。

男性への接種は、4価のみ承認されていますが、公費負担の対象にはなっていません。厚生労働省の専門家委員会で議論されましたが、今春、見送られました。自費で接種すると約5万円かかりますが、費用を助成する自治体も出てきています。

がんサバイバーや家族は様々な悩みに直面しています。毎日の生活のこと、仕事のこと、家族のことなど病院の医師や看護師に相談しにくいことも、少なくありません。

日本対がん協会のがん相談ホットラインにはたくさんの相談が寄せられ、相談員が一人ひとりの思いを受け止めています。シリーズ「がん相談ホットラインより」で相談員の思いをお届けしています。がんサバイバー・クラブのサイト(<https://www.gsclub.jp/>)でもお読みいただけます。



がん相談ホットライン 03-3541-7830

毎日受け付けています

【受付時間】 10:00～13:00 15:00～18:00

社会保険労務士による「がんと就労」電話相談の予約はインターネットの専用フォームで受け付けます。がん専門医による相談は今年度休止します



社労士による電話相談

電話がつながりにくいことがあります。何卒ご了承ください